

みんなで守り・楽しみ・活かす
都市・ふくおかの森づくり
どくほん
森林と林業を学ぶ読本

福岡市 農林水産局 森づくり推進課

電話：092-711-4846 FAX：092-733-5583

メール：morizukuri.AFFB@city.fukuoka.lg.jp

令和4年3月発行

ふくおかの森

● 福岡市の3分の1は森林です。

人口160万人を超えた福岡市。住宅やビルが広がる印象
 がありますが、市の面積の3分の1は森林です（図1）。
 早良区南部の脊振山地をはじめ、油山周辺、糸島市との境界、
 志賀島や能古島などにまとまった森林があり、市街地の中
 にも点々と小さな森林が残されています。

図3からは、福岡市をかこむように森林が広がっている
 ことがわかります。

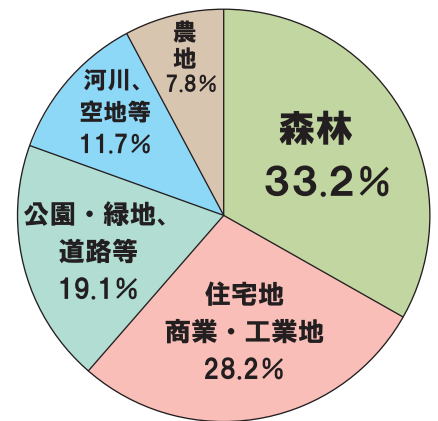


図1. 福岡市の土地利用の割合

● 人工林と天然林

森林は「人工林」と「天然林」
 の二つに分けられます。

人工林は人の手でスギやヒノキ
 などの苗木を植え、育ててきた
 森林のことです。

天然林は、自然に落ちた種から
 芽が出て育った森林で、色々な
 種類の木が生えています。

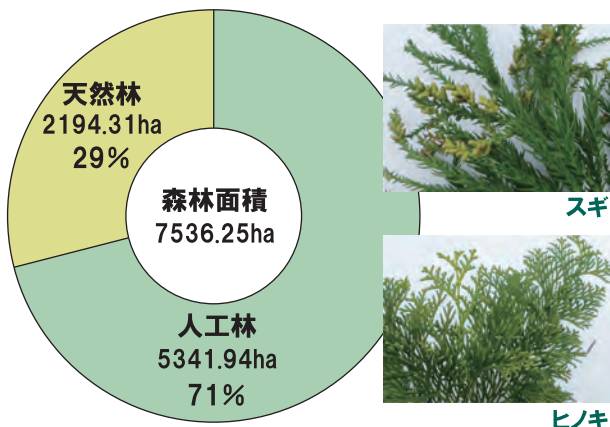


図2. 人工林と天然林の割合
 (国有林をのぞく)

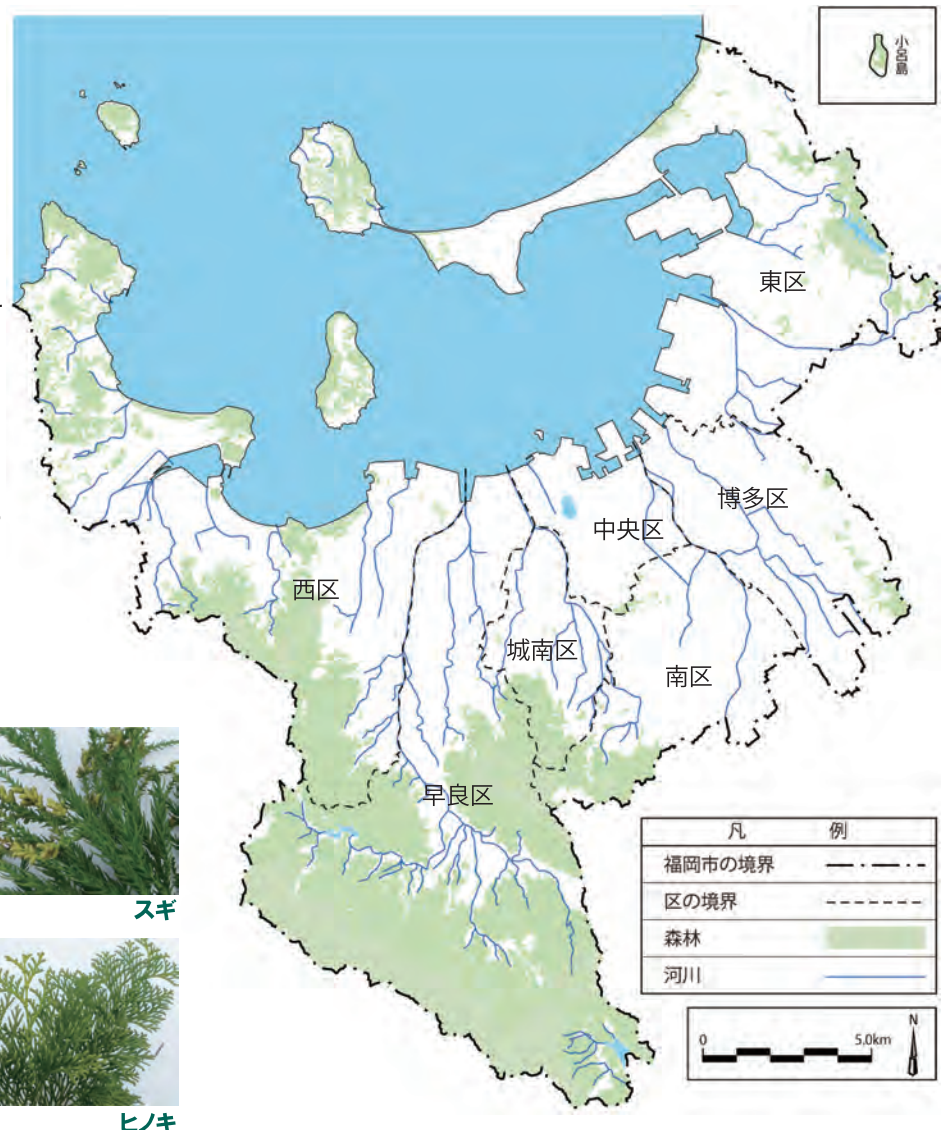


図3. 福岡市の森林の位置

森林の働き、森の恵み

● 森林の持つ「多面的機能」

森林には私たちの暮らしを守り、豊かにしてくれている様々な働きがあります。

例えば、土砂くずれや川の洪水を防いだり、降った雨水を蓄えてくれたり、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を抑えてくれたりといったことです。



図4. 森林の持つ多面的機能

● 生物多様性を守る森林

森林は私たちの身近な生きもののすみかでもあります。例えば、左下の写真のニホンアカガエルは真冬に水辺で産卵しますが、普段は森で過ごします。森と水辺の両方があり、それらがつながっていることがニホンアカガエルにとって大切です。



ニホンアカガエル



ミゾソバ



モクスガニ

森を守り、育てる仕事「林業」①

●「林業」ってどんな仕事？

ひとことでは「木を植えて、手入れをしながら育て、大きくなった木を収穫する仕事」^{しゅうかく}です。近年では写真のような高性能林業機械を使った作業も増えています。^{こうせいのお}^ふ



枝を切り落として同じ長さに切り分ける「プロセッサ」



伐った木材を集めて運ぶ「フォワーダ」

● 手入れをしないとどうなる？

人の手で植えられた人工林は、間伐などの^{じんこうりん}^{かんぱつ}手入れが行われないとどうなるでしょう？
下の写真を見くらべてみましょう。



木と木の間がせまく、日光がとどかず、雨がふると雨水と一緒に土が流れ出てしまう。

手入れがされていない森林



日光が地表までとどくことで、下草が育ち、やわらかい土が水を蓄える。

間伐が行われた森林

● 森が育ってきている

「林齢」とは、その森林の木々が何歳か？^{りんれい}^{さい}という意味です。円グラフを見ると、福岡市の人工^{じんこう}林の約82%が41年以上に育っていて、伐採^{ばっさい}できる時期になっていることがわかります。

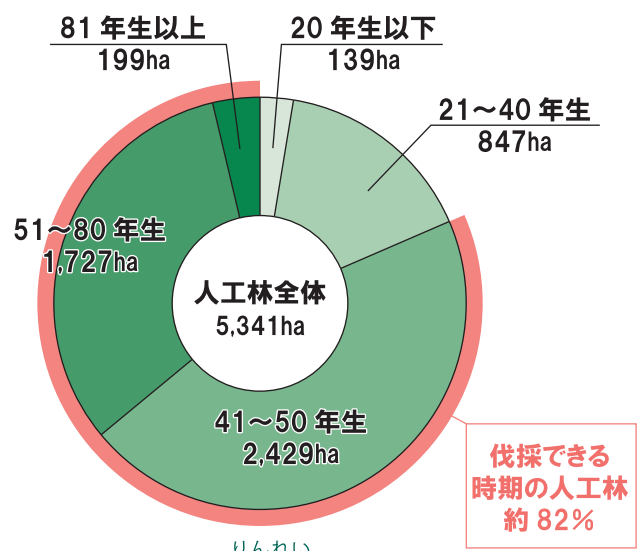


図5. 人工林の林齢ごとの面積

森を守り、育てる仕事「林業」②

●「伐って」「使って」「植える」

育った人工林は伐って、使って、植えることが大切です。このサイクルを回しながら、二酸化炭素の吸収など多面的機能を発揮するバランスのとれた森林を保つのが林業の仕事です。



図4. 林業のサイクル (出典：農林水産省「ジュニア農林水産白書 2021年版」)

● 林業をしている人は何人？

福岡市で働く人のうち林業をしている人はおよそ 0.01%です。100人に満たない人数で広大な森林を支えています。

林業の作業の様子



森を守り、育てる仕事「林業」③

堀さんのお話

この仕事を選んだ理由は、緑の中で仕事がしたかったことと、まわりの人がやらない仕事をしたいと考えたからです。



夏の暑さや冬の寒さの中、山で作業することはきびしい時もありますが、森林の整備は、自分自身が行った仕事が見えて、達成感を味わうことができます。安全第一で、楽しく作業することを心がけています。

みなさんにも、森林に関心をもって、森林を大切にしてもらえたらうれしいです。

福岡県広域森林組合の堀さん

1日の仕事内容の例

7:45	<ul style="list-style-type: none"> 事務所へ出勤 山の作業場所へ移動
8:45	<ul style="list-style-type: none"> 作業場所に到着 作業開始 スギ・ヒノキの伐採（間伐） 準備（伐採する木へのワイヤーかけなど） 伐採
12:00	<ul style="list-style-type: none"> 昼食（山でお弁当）
13:00	<ul style="list-style-type: none"> スギ・ヒノキの伐採（間伐） 伐採 フォワーダで丸太を集め、運び出す
16:30	<ul style="list-style-type: none"> 作業終了 事務所へ移動 道具（チェーンソーなど）の手入れ 翌日の準備
17:30	<ul style="list-style-type: none"> 退勤

● いろいろな木の使いみち

伐った木をならべて運ぶ準備をしている写真です。これから建物の柱や板、家具の材料など、様々に使われていきます。



ならべられた丸太



木のボールプール
(油山市民の森)



木材を使った学校教室
(照葉北小学校)



木のテーブル・イス
(ともてらす早良)

みんなで守り・楽しみ・活かす 都市・ふくおかの森づくり

● 福岡市森づくりの基本方針

福岡市では身近な森林を大切にしていくために目標と基本方針を立てました。
「みんなで守り・楽しみ・活かす 都市・ふくおかの森づくり」を目標として、
5つの視点からみんなで森づくりに取り組んでいきましょう。



1. 安心

毎日の暮らしを快適にし、災害を減らす「安心の森づくり」



アレルギー（花粉症）を減らすための森づくり



災害に強い森林を育てるための手入れ

2. 遊び

身近な自然を体験し学ぶ「遊びの森づくり」



誰もが行きやすい、使いやすい施設の整備



森の新しい楽しみ方を考え、提案する

3. 水循環

せぶりさんけい はかたわん
脊振山系から博多湾
りゅういき
まで流域全体で行う
みずじゅんかん
「水循環の森づくり」



水を蓄える「水源かん養機能」を高める森づくり



山～川～海のつながりが海を育てることを意識して森を手入れする

4. 環境

きこうへんどうたいさく せいぶつ
気候変動対策と生物
たようせいほぜん
多様性保全に 대응する
かんきょう
「環境の森づくり」



温室効果ガスの吸収や生物多様性保全の働きを高める森づくり



市民・企業が共働して（一緒に働いて）森の保全活動を行う

5. なりわい

しぞくてき
持続的な森の利用と
生産を目指す
「なりわいの森づくり」



福岡市で育った木を建物や家具などに使う



生産性の向上とともに森づくりを行う人を育てる

森とともにある福岡を楽しもう！

学校活動や、家族・お友達と^{いっしょ}一緒に、できることがいろいろあります。
みんなでふくおかの森を守り、楽しみ、活用しましょう！



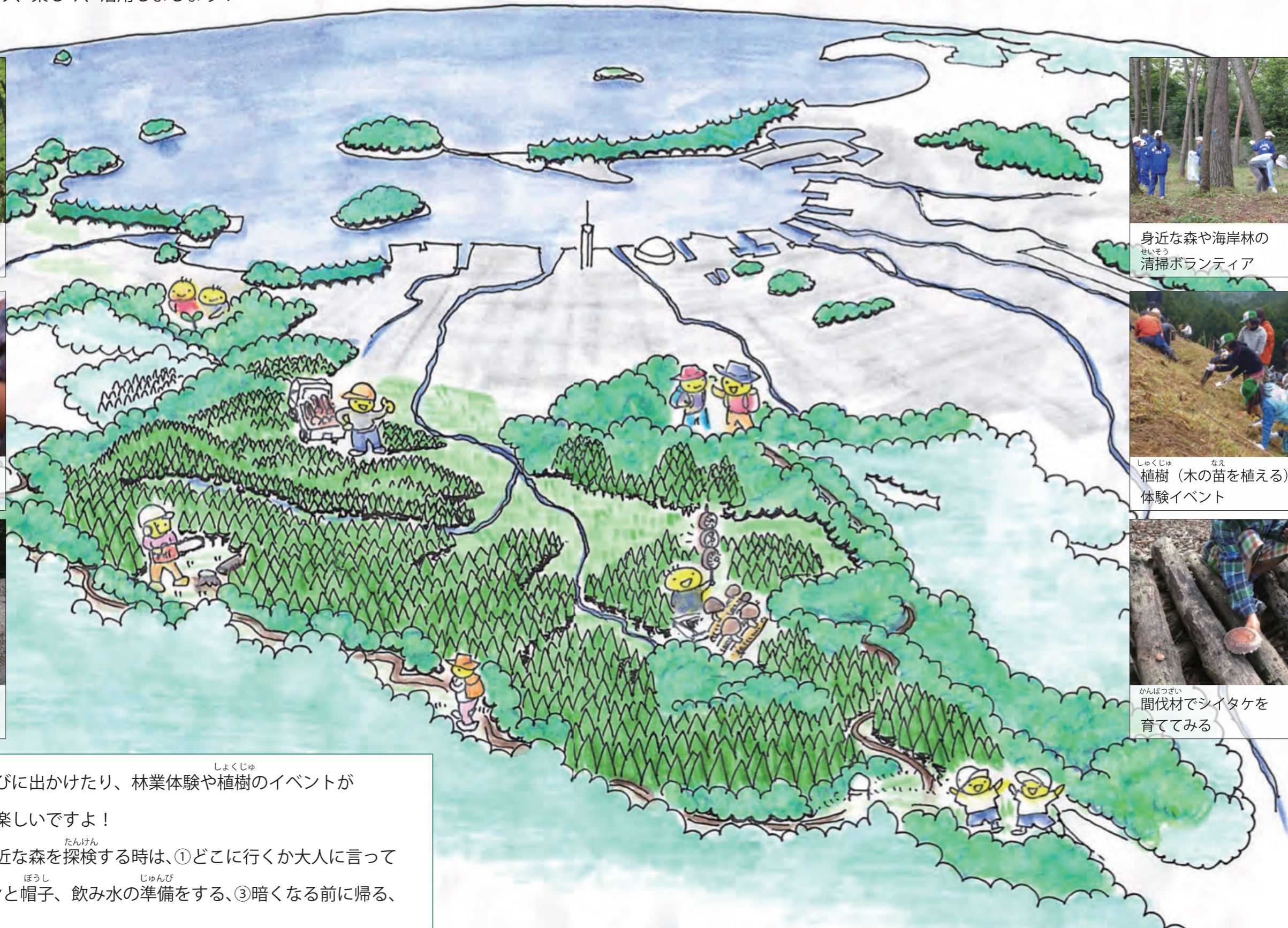
ピクニックや登山、
森のアスレチック



木を使ったクラフトや
ものづくり



林業体験教室に
参加してみる



身近な森や海岸林の
清掃ボランティア



植樹（木の苗を植える）
体験イベント

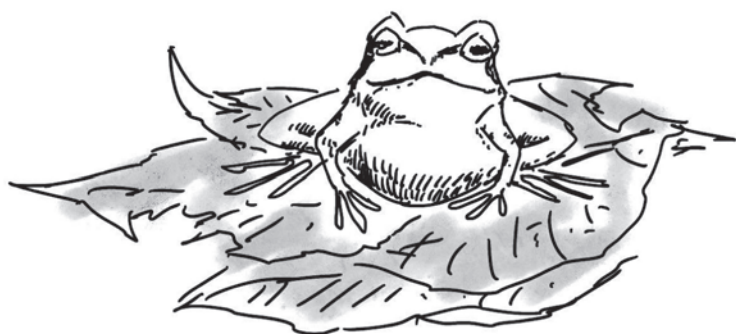


間伐材でシイタケを
育ててみる

おうちの人と^{いっしょ}一緒に森あそびに出かけたり、林業体験や植樹のイベントが
あれば参加するのもきっと楽しいですよ！
シズクとイツキのように身近な森を探検する時は、①どこに行くか大人に言って
出かける、②長そで長ズボンと帽子^{ぼうし}、飲み水^{じゆんび}の準備をする、③暗くなる前に帰る、
をしっかり守ってください。



シズク と 木 林



年

組

名前

みなさんは森を歩いたことがありますか？

靴くつの底から伝わってくる土かんしよくの感触かんしよくや

森の中の空気みきのにおい、木の幹みきの手ざわり。

森林や林業のことを学ぶ時には、実際じっさいに森に入った時

の感触かんしよくや雰囲気ふんいき、それに森に関わる人たちの気持ちきもちを

思い出したり、想像そんぞうしたりしてほしいなと思います。

これを読んで興味きょうみがわいたら、ぜひ身近な森に

行ったり、調べたりしてみてくださいね。

登場人物

シズク

主人公の小学5年生。少し引こつ込み思案しあん。

イツキ

小学4年生の男の子。自然や生きものにくわしい。

タキ

イツキの祖母そぼ。昔むかしながらの製法せいほうで豆腐とうふを作っている。

リュウジ

水源すいげんの森を守るボランティアをしている林業家。

お話 のじまさとし（マイマイ計画）

挿絵 うらかわこついちろう

編集 NPO法人グリーンシティ福岡

第1話 冬

ゆうつつな気持ちのとき、私は自転車でわざと迷いそうな道に行く。できるだけ、知らない道で嫌なことがあったこの日もそうだった。知らない道で自転車をこいでいた。何にも考えたくない。まだ寒いけれど、背中を照らす太陽が温かかった。春が近い。

気が付くと、辺りにはもう何も建物が見えなかった。ゆるい登り坂が続き、私は自転車を降りた。

自転車のスタンドをガチャンと鳴らすと、足元でバツタが跳ねた。なぜか私の顔の方に向かって飛んできたもんだから、よるめいた次の瞬間。べちゃ。ああ、やってしまった。水たまりを踏んだのだ。

散々な気持ちで足元に目をやると、なにやらブニョブニョのコンニャクみたいなカタマリがあった。幸い踏んづけてはいない。しかし、なんだこれ。得体の知れない透明のカタマリの中には小さな黒いつぶつぶがあった。

「ああ、そこにもあったんか」

突然声が聞こえておどろいた。こんなところで人に会うなんて。見ると、まだ寒いのに半袖シャツ着た男の子。手には今私が見ていたコンニャクのカタマリみたいなものを、両手を器のようにして持っている。手からは水がぼたぼたしたり落ちていた。

「なあ、今、両手ふさがつとーけん、その卵、持ってくれん？」男の子が言った。

「え？卵？……まさか、このコンニャクみたいの？なに、これを、手で？」



「あー、いいけん。はよ」

「ちよっと、え？ 手で？ えっと…」

「コンニャクみたいな卵を軽く指先でつつくと、ぷよん。やわらかい。なんだこれ。いつも頼まれると嫌と言えないんだけど、これはさすがに勇気がある。なんか、得体が知れなくて、どうしたらいいのか。でも、あの子は両手で抱えながら、ずっとこっちを見る。うう。プレッシャー。」

でも……、どうせ散々な一日なんだ。私は思い直した。ああもう、どうにでもなれ。

両手でカタマリをすくった。少し冷たくて、ふるんふるんの感触。形が崩れるかと思ったら、意外と丈夫で、カタマリのまま両手に収まった。崩れない。ああ、うわあ。でも、これどうするの。どこに持って行くの。

気づくと、男の子はもう走り出していた。

「ま、待ってよー」

「あの子、どんどん先に行く。見失ったらいいよ本当の迷子になる。得体の知れない物体を持ったまま迷子なんて、いくらなんでも最悪だ。なんとか先を急ごう。」

見晴らしの良いところに出ると、「ほら、ここだ」と男の子が言った。目の前には、小さな浅い池があった。水が透き通り、底までよく見える。太陽の光に照らされて、水面がキラキラ輝いている。男の子は池に両手をそっと沈めて、カタマリを水に浮かべるように優しく手をはなした。卵がぷるんと揺れながら沈んだ。

私も見よう見まねで、両手をゆっくり水に沈めた。冷たい。小さなオタマジャクシが、すいすい泳いで離れていく。そのまま私は、カタマリを水に沈めた。「すごい……」と、思わずつぶやいた。水底には植物がところどころに生えていて、小さな黒いオタマジャクシがたくさん泳いでいる。卵も透き通って、さっきよりも美しいものに感じる。小さな水族館のようで、幻想的で、しばらく見とれてしまった。



「きれいやる。ここなら、アカガエルも元気に育ってくれるんじゃないかな」男の子がつぶやいた。

「アカガエル？ これ、カエルの卵？」たまで

「あ、知らんやった？ そう、二ホンアカガエルの卵」たまで

「二ホン、アカガエル……」

「ああ、いきなりごめんな。これ、絶滅危惧種のカエルなんや。あの水たまりやと、いずれ死んでしまっけん。だから、こっやって助けるんよ」

「そうなんだ」

「おれ、イツキ。お前は？」

「……シズク」

わたしは、自分のてのひらを見つめた。冷たくかじかんで、ちゃんと開かない。カエルの卵たまご、初めてさわった。思い返すと、意外と悪くない感触だったなあ。絶滅危惧種……か。そもそもカエルなんて全部おなじかと思っていた。私には、まだ知らないことがいっぱいある。

「あら、おじょうちゃん」

今度は後ろから知らない人の声がして、立ち上がった。そこには、やさしそうなおばあさんがいた。

「あ、え、すいませ……」びっくりして謝ろうとする私の声を、イツキがさえぎった。

「ばあちゃん！ アカガエル！ また水たまりに卵産みよった！」たまで

「またかい。助けてやったかい」

「池にみんな入れた。シズクも、よう知らんのに手伝ってくれよった」
「シズクちゃんっていうのね。ありがと。冷えたらう。良かったら、うちに寄りね。なんもないけど、湯豆腐で良かったら、食べて帰り」

「え、「豆腐？」甘いお菓子ならわかるけど……」。

それからイツキの家に案内され、縁側で湯豆腐をいただいた。聞くと、イツキのおばあちゃんのタキさんは、ここで何十年も井戸水を使って手作りの豆腐を作っているんだって。豆腐なんてどれもたいして変わらな
いと思っていたけど、タキさん特製の湯豆腐は、本当においしくて、冷
えた身体も温まった。豆腐がこんなにおいしい食べ物なんて、思っ
てもみなかった。

なんにもなさそうな場所にも、ありふれたようなものにも、まだ私の
知らないことがたくさんある。ゆうつつな気持ちはどこかに行ってしまった。
た。

それから毎日のように、私はこの場所に通った。



第2話 春

イツキやタキさんと出会ってから、3カ月がたった。私はあれから毎日と言ってもいいくらい、この池に何度も通った。二ホンアカガエルの卵は半月くらいで順調にふ化して、今では立派なオタマジャクシになった。時々浮き上がって水面までやってきて、また沈んでいく。春は日差しが暖かくて、そんな様子をぼーっと見ているだけで、なんだか幸せな気持ちになる。

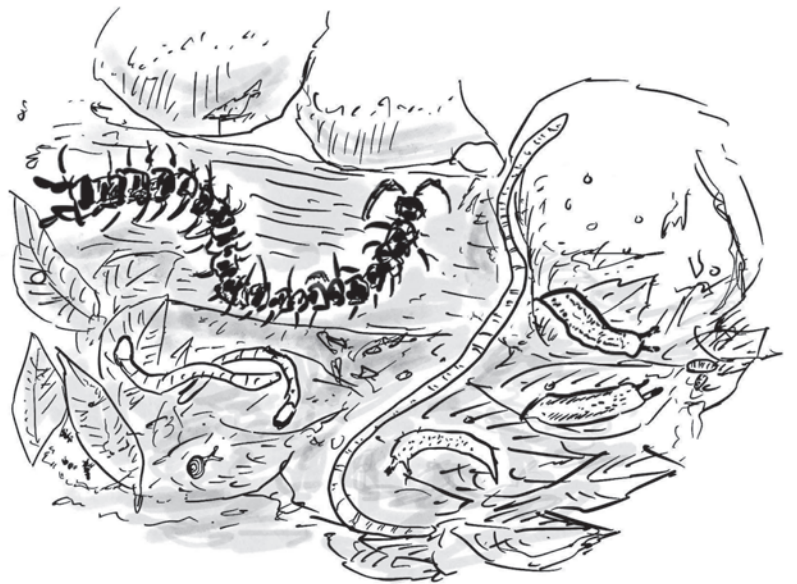
私はもともとカエルが好きじゃなかったけど、自分の手でここに運んできたなら、なんだか愛おしく感じるようになった。どうかほかの生きものに食べられずに元気に育てほしいな。そのことをつぶやいたら、イツキは何とも言えない顔をした。

「卵を助けたのは、カエルのためだけじゃないよ。オタマジャクシを食べる、ほかの生きもののためでもあるけん」イツキはまっすぐ池を見ながら言った。イツキはここで暮らす生きもののは何でもよく知っている。きっと、どの生きものもみんな愛おしく思っているのだろう。それにしても、イツキはときどきトキッとすることを言う。

イツキのおばあちゃん、タキさんは、私に草花のことを教えてくれる。なかでも良い香りのするセリとミツバが私のお気に入り。今日もミツバが池のそばの土手に生えていたから、思わず手を伸ばした。すると、何かがぴよんと動いた。

「つそ。カエルの赤ちゃん？」見ると、とっても小さな、オタマジャクシより少し小さいくらいのカエルだ。「……これ、まさか二ホンアカガエル？」

「え？ あ、こっちにもある！ そっやん」イツキも見つけたらしい。



「見て。ここにも、あそこにも」池の横の斜面にたくさんいた。一匹見つかると、不思議と次々に見えてくる。

「おお。すげ。気づいたらんやった。あいっら、もっこんなにカエルになっとったんや」

小さなカエルたちはぴよこぴよこ小さく跳ねていて、みんな同じ方を向いているようだった。

「ねえ、カエルたち、どこに行くのかな」

「森の中で育つらしいけん。森かな」

「みんな森に行くの？」

「やろっね」

「私たちも行ってみようよ」

私は居てもたつてもいられなかった。イツキの返事も聞かずに、階段も何もない斜面に向かい、夢中で登り始めた。しげみをかき分け、濡れた地面で何度も足をすべらせ、木や草にしがみつきのながら。

やっこの思いで斜面を越えようと、もっそこは森の中だった。背の高い大きな木も、背の低い細い木もある。まっすぐな木ばかりじゃなくて、途中でくねっと曲がった木もある。上を見ると、緑の葉っぱが太陽の光を透かして、少しまぶしい。よく見ると葉っぱの緑にも色んな緑がある。濃い緑もあれば、黄色っぽい緑もある。まるで自分が小人になって、浮草がいつぱいの池の底にやってきたみたい。

足元に目をやると、落ち葉が敷き詰められた地面に、ぴよこぴよこ小さなカエルたちが跳ねていた。このカエルたちのなかには、私のすくった卵からかえったカエルもいるのだろうか。

「ハアハア……。シズクの服、小人がおる」後ろから追いついたイツキが、息を切らせながら笑った。



私の服は、斜面を登ったときについた葉っぱと泥がいっぱいだった。ポケットには、本当に白い小人みたいな形の花が刺さっていた。イツキが言うには、ユキノシタという花だって。

「あ。ここ、ばあちゃんと来たことがある」イツキがつぶやいた。

「どうしてわかるの？」

「あのクスノキ。前に会ったことあるけん」

木に「会ったことある」と、人間みたいに言うてイツキは駆けだした。近づくと、とっても大きな木があった。イツキはおもむろに足元の落ち葉を拾い、ちぎって匂いをかいだ。私も真似して、足元の落ち葉をちぎって匂いをかいだ。なんだかスーッとする、なつかしいような不思議な香りがした。

「はあー。ひさしぶりやなー」イツキはその大きなクスノキという木に、ため息まじりのあいさつをした。

「大きな木。何歳くらいなのかな」

「わからん。ばあちゃんよりもずっとずっと

……何百歳とかなんやろな」そう言って、イツキはクスノキの大きな根っこに腰かけた。



わたしは想像もつかない年月のことを考えながら、クスノキを見上げた。木々の枝や葉っぱが広がり、木々が空を分け合うように森の天井を作っていた。風に揺れる枝葉の音、小鳥のさえずり。気持ちが良くて耳を澄ますと、ちよろちよろと水の流れる音もきこえた。

「この近く、川がある？」

「ああ。すぐそこな。小さいけど、池にも続いとる」イツキはクスノキの奥を指さした。

「池の水、この森から来てるんだ」池の水がどこから来てるか、私は考えたことがなかった。

「うん。昔はもつと、水が多かったらしい」

「水が減ってるの？」私が聞くと、イツキは黙ってうなずいた。水が減り続けたら、池の水もなくなってしまっただろう。ニホンアカガエルも、卵を産めなくなる。「どうして減ってるの？」

「……わからん」イツキは下を向いてつぶやいた。

「わかんないなら、探検してみようよ」黙ったままのイツキに、私は言った。

「探検？」

「そう。水がどこから来ているのか、確かめるの。そうしたら、水が減った理由がわかるかもしれない」

「探検か……。なんか、おもしろそうやな」

「いいでしょ。森の水探検隊」

「おお、いいな。よし。行ってみよう」

第3話 夏

森の水探検隊は、夏休みに活動することにした。それなのに、夏休みに入っすぐ雨が続いて、なかなか探検に出られない。あんまり雨が続きと、災害のニュースもあって心配になる。イツキやタキさんは元気にしてるかな。あの辺りの道路は、よく土砂崩れで通行止めになるみたい。

この日も小雨が降っていた。でも、もう待ちきれなかった。朝4時半くらいに目が覚めて、いつも早起きのタキさんに電話をした。イツキに今日探検行くって伝えてほしいと。

まだ暗かったけど、朝早いほうが涼しくていい。眠い目をこすりながら、長靴とレインコート、おにぎり2つと水筒を自分で用意した。起きてきたお母さんには、森の探検に行くだけ伝えて、出発した。自転車はやめて、イツキの家の近くまでは始発のバスに乗った。

停留所からすぐの登山口で、イツキと待ち合わせた。イツキはレインコートを着て、懐中電灯を持って待っていた。

「おはよ。やっと探検だね」

「やっとやな。森の水探検隊」

私たちはわくわくしながら、森の散策路の入り口に立った。いよいよ探検の始まりだ。

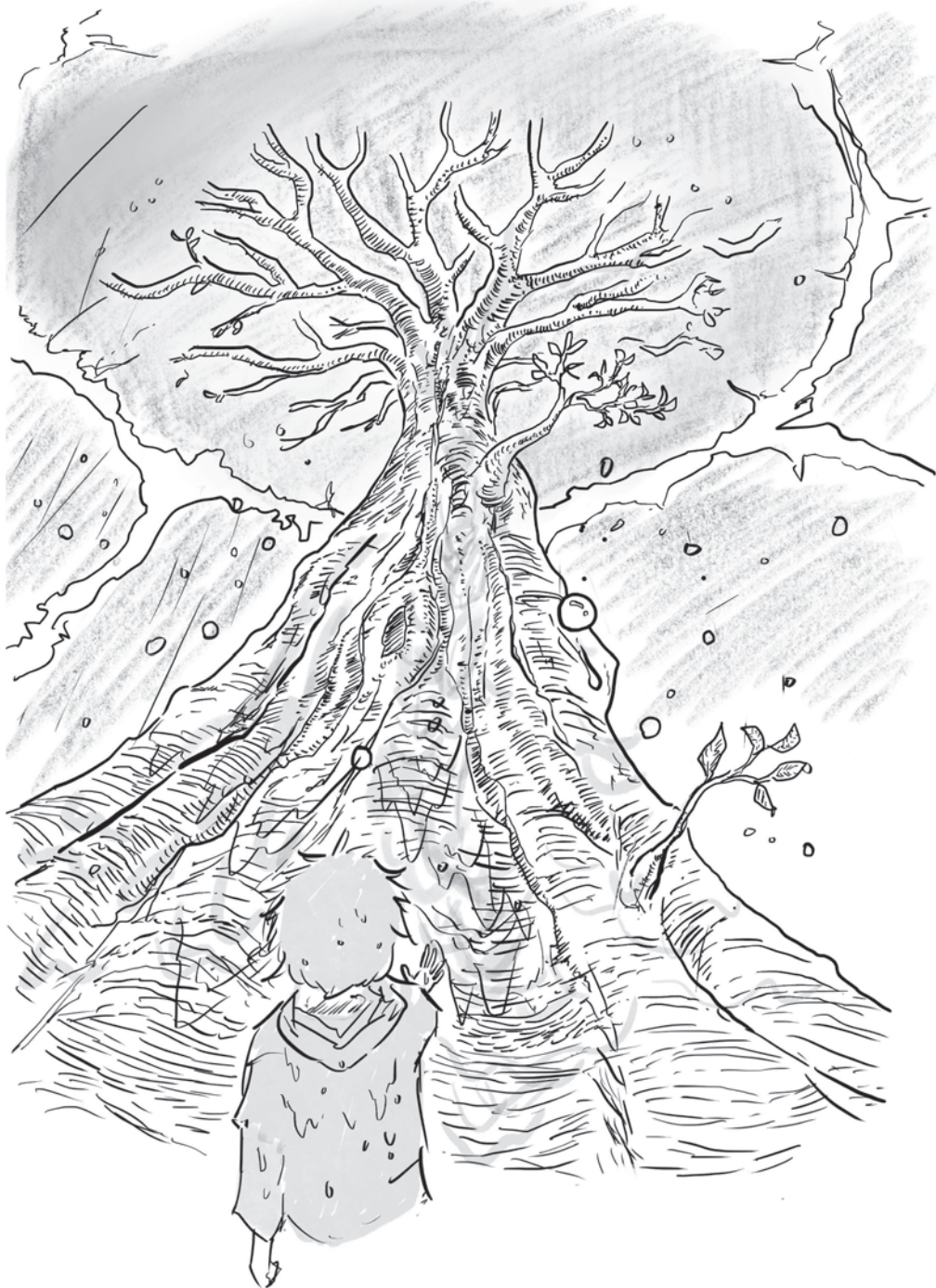
雨の森は、いつもと表情が違った。しっとりとして、薄暗い。フードが邪魔で、レインコートから頭を出した。シトシトと雨音が聴こえるけれど、木の葉がかさになってみているみたいで、思ったほど雨粒を感じない。ただし、風が吹くとザーツと音がして、そのたびにたくさんの雨粒が落ちてくる。

しばらく歩くと、春に見たクスノキの大木があった。あいさつ代わりに幹みきに手を当てた。「わ！」すぐに叫さけんで、手を離はなした。幹みきの表面を流れる水が腕うでを伝い、あっという間に服の中まで入ってきたのだ。

「幹みきに水が流れてる！」

「おお。小さな川が流れようみた
いやな。……見て。こっちにも川
がある」イツキは言った。よく見
ると、クスノキのあちこちに、さ
らに他の木の幹みきにも、そんな小さ
な川が流れている。幹みきを下るにつ
れて流れと流れが合わさって、少
し大きな川になり、最後は根元に
注いでいた。

「この小さな川が、池の始まりな
のかもしれない」私わたしがつぶやくと、
イツキはうなずいた。「小さな川」
が注ぐ根元は、落ち葉がいつぱい
でやわらかい。すぐそばを大きな
ナメクジが這はっていた。



イツキと歩いていると、会話は少ない。世間話なんて何も無い。でも、ちつとも嫌な感じがしない。話を合わせたり、無理に話を作る必要を感じなくて、楽だった。雨音や風の音、鳥の声に耳を傾け、ただ森を歩いている。それだけの時間を共に過ごすのが楽しかった。

散策路を進んだ先には、小川が流れていた。あの、池にも続く小川だ。

「見て。大きなカニがいる」私は指をさした。

「おお、ツガニやん」

「ツガニ？」

「ほら、ハサミのところは藻くずみたいにモフモフになつとつ、見えるやろ」

「ほんとだ」

「図鑑には、モクスガニって書いてう。海からここまで、よう登ってきよったなあ」

「え？ このカニ、海で産まれたの？ 信じられない」「海からここまで歩いたら、私の足でも何日かかるだろう。それなのに、カニが流れに逆らって歩いて来たなんて。」

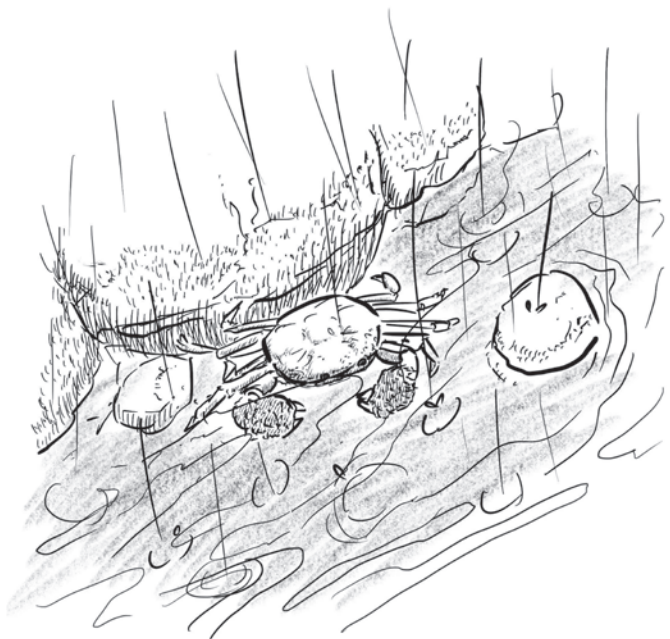
さらに道は続く。だんだん明るくなり、汗もかいてきた。

ここで森の雰囲気も変わった。茶色のまっすぐな細い木がたくさんある。地上には草や低い木が少なくなつて、森の奥の方まで見渡せる。

すると、「林道」「山頂」という案内板がある分かれ道にさしかかった。

「どっちに行ったらいいかな」

「うーん」



どちらに進むか迷っているうちに、近くでグウィーンというエンジン音が鳴り響いた。やがて、ミシミシミシ、ダーンという大きな音。ザワザワと木々が揺れる。ピーツと笛のような音がして、ブルルンと、エンジン音がとまった。

「木、倒したん？」 イツキは言った。

「水が減っている原因って、もしかして……」 私が言うと、イツキの表情が険しくなり、すぐに音のする方へと走り出した。私も後を追った。

そこにいたのはヘルメットをかぶった数人の大人たちだった。

「木を伐るなー！」 イツキは大声で叫んだ。

大人たちは何やら目配せをして、1人が眉間にしわを寄せ、近づいてきた。私のお父さんよりも年をとっていそうな、大柄な男の人だった。私とイツキは、一步後ずさりをした。

「おはよう。君たち、木が好きなんやな。おれらも森が好きだったい」その人は、一転して優しくにそう言った。

「うそ。そしたらなんで、木を伐ったりするんよ！」 イツキはもう泣きそうな顔をしていた。

「ああ。木を伐るんはな、森を守り、水を守るためったい」

「森を守る……？」

「それって、どういうことですか？」 私は間に入って聞いた。「どうして、木を伐ることが、森を守ることになるんですか」

「ああ。それはなあ。森の手入れ。間伐たい。」

「かんばつ？」

リュウジと名乗るその人の話は、こうだった。この森はスギ林。スギ林は人の手で植えた人工の森だ。だから、人が手を入れて管理をしないと荒れてしまう。今はそんな荒れた森が増えている。間伐とは、密集した木を適度に伐って、森に光を入れる大事な作業。光が入ることで、残された木も元気になり、地上の植物も育つことができる。間伐をせずに放っておくと、木は細く



なり、地上の植物は育たず、土も雨で流れやすくなる。災害も増える。

「そういえば、大雨のとき、池の水、茶色になりよった」イツキは言った。

「そうか。土が流れてきよるのかもしれない」リュウジという人は言った。木を伐るのが森を守ることになるなんて、思いもしなかった。私たち、まだまだ知らないことばかりだ。

「でも、どうしてそれが、水を守ることもなるんですか」私は聞いた。

「森は、水を蓄えとるったい」と言い、リュウジという人はシャベルで軽く地面を掘って、土を持ち上げた。それを両手でギュッと絞ると、水がたくさん出てきた。

「水をよう含んどつやる。ここは水源涵養林とも呼ばれよる。水源涵養林ゆつのは、要するに、水を蓄える森っていうことたい。おれらは水源林ボランティアゆつて、森の手入ればしよる」

「水を蓄える森……」

「豆腐や……」じつと話を聞いていたイツキが小さくつぶやいた。「豆腐のほとんどは、水でできとる。水は豆腐の命だつて、ばあちゃんがよう言つとつ。ここん土は、豆腐作

るときにギュッと水を絞るみたいに、ようと水を含んどる。そうか。森つて、豆腐とおんなじやつたんか」

「豆腐？もしかして、君は、タキさんところの子かい」リュウジさんは言った。

イツキは小さくうなずいた。

「おれらもよう豆腐を食わしてもらつとつたい。そうか。君んところの豆腐は、井戸水を使いよるやろう。井戸水は地下水や。

この森の落ち葉や、落ち葉からできた土があるやろ。その下は岩盤層つて言つて、岩たい。その岩のさらに下の方まで行くと、

地下水が流れよる。井戸水は、その地下水を汲み上げたもんやけん、この森に降る雨も、豆腐に入つとつゆつことやな」

イツキは何か腑に落ちたようだった。

「土や岩の隙間で、水はろ過されて、きれいになる。だから、おいしい豆腐になる。地下水だけやない。水道水やって、この森が蓄えた水なんよ」

「水道の水も？」私は驚いてしまった。だって、水道の水が、森から来てるなんて。

「森は水を蓄えて、浄化する。森の手入れで木を伐るのも、そんな水を守りたいからなんよ」

水は森から来ている。そして、森に暮らす生きものや、私たちの暮らしも支えてくれている。水道から出る水さえも、森から来てるんだ。

池の水が減っていたのは、森が手入れされずに、荒れてしまったからなんだ。

第4話 秋

「おいしいなあ。月を見ながら豆腐とキノコの鍋を味わう。最高だね」

秋の夕暮れ。満月。イツキ、タキさん、そしてリュウジさんはじめ水源林ボランティアの大人たち。今日はイツキの家の庭で、お月見しながらキノコ鍋を囲んだ。森で集めた焚き木を使って火をおこし、森で採ったキノコと、手作り豆腐を入れて鍋を作った。あったかいし、最高においしくて、幸せだ。

朝のキノコ狩りは楽しかった。キノコの種類を見分けるのはとてもむずかしいけど、リュウジさんはキノコの専門家でもあるらしく、とても詳しい。夏にリュウジさんと仲良くなって、今日は私のたつての希望でキノコ狩りに出かけたのだ。森の中にはいろんなキノコがあって、小さいのや大きいのや、赤いのや白いのや茶色いのもあって、不思議な形をしたものもたくさんあった。つつくと煙みたいなのが出るキノコもあった。ただ、キノコには毒があるものも多いから、リュウジさんが良いと言ったキノコだけを採って帰ってきた。

「森にとって、キノコはとっても大事な生きものなんよ。落ち枝や落ち葉を分解して、土にしてくれるのはキノコなんよ。木があって、キノコもあって、カエルもあって、ヘビもおって、鳥が鳴きよる。そんないろんな生きものがおる森が、水を蓄えて、水をきれいにしてくれるんよ」リュウジさんはそう教えてくれた。





ひさ
久しぶりに来た池の周りには、ピンクや白の、コンペイトウに似た花がたくさん咲いていた。
「かわいかる。ミソソバって言うんよ。どこでもよう生えよるが、かわいくて、この時期はどつも刈りきらんでね」タキさんは言っ
た。

しゃがんでよく見ると、1つに見える花も、小さな花が集まってできていた。

ミソソバに見入っていると、足元でガサツツと音がする。目を向けて驚いた。

「わ！ 大きなカエル」

豆腐を頼張ほおばっていたイツキがあわてて駆けつけかてきた。カエルは不思議とおとなしかった。

「アカガエルやん。たぶんニホンアカガエル」イツキは言った。

「え。こんなに大きいの？」

「そつよ。おとなになつたらこんなもんよ」

「あんなに小さかったのに……」

「これから冬眠とうみんやけん、お前もおなかいっぱい食べんといかんよ」イツキはカエルに言った。

寒さのせいか、アカガエルはじーっと動かなくて、私わたしたちの話わに耳かたむを傾かたむけているようにも思

えた。

「シズクちゃんが助けてくれたけん、お礼を言いに来たんやないと」タキさんが言った。

「あ。なら、シズクがすくったニホンアカガエルよ」イツキも付け加えた。

「えー。そんなことあるとーと？」なんだか変な言葉が出てきた。みんなが笑ったのを見て、

私わたしも自分で笑ってしまった。

「シズク、なんか変わったね」イツキが言った。

「そっかな」

ここに来る前までは、いつも周りの人に合わせなきゃいけないんだって思ってた。でも、今は、ありのままの自分で居たいんだって実感している。

自然の中には色々な生きものがある。キノコなんて、その代表みたいなものだ。変な形だって堂々と生きて、つながりあって、支え合って生きている。無理に自分を飾ったり、背伸びしたりしていない。毒の毒もあれば、こんなにもおいしいものもある。私は何も変わってない。ただ自分のまま、自然のまま、生きられるようになっただけ。

「シズク、ポケットパンパンよ」イツキが笑った。そっそっ、忘れてた。森で集めた色々なドングリたち。小さなドングリ、長いドングリ、大きく丸いドングリ。イツキと工作に使おうって約束した。「何つくろっか。あ、その前に、ドングリ餅も教わらなくちゃ」

スタジイっていうのが、生でもほんのり甘くて美味しいドングリ。マテバシイっていうのもたくさん集めた。今度は、タキさんに教わりながらドングリ餅を作るんだ。

じーっとしていたアカガエルが、ピヨンと勢いよく跳ねて、藪の中に入っていった。これから冬眠して、また冬になったら、いったん起きて産卵するんだって。毎年毎年、これまでもこれからも、そんなことを繰り返す。

水と森のために、私も何か、できるだろうか。ニホンアカガエルのためにも。タキさんがずっとおいしい豆腐を作り続けるためにも。人や生きものやみんなの水を守るためにも。

それから、私が自分らしく生きていくためにも。

(おわり)

